

## 保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察（２）

### A Study on Significance of Simulated Childcare in Nursery Teacher Training (2)

猪田 裕子\* 久保木 亮子\*\* 塩津 恵理子\*\*\*

#### 要旨

幼稚園教育課程及び保育士養成校の学生にとって実習は大きな課題である。その課題に対し漠然とした不安を抱く学生は少なくない。そこで、より現場に即した具体的な学びの可能性を探るため「保育実習Ⅱ（保育所）」の事前指導で模擬保育を導入している。2018年度は、2017年度の課題を顧みて、模擬保育の経験がどのように実習で活かされたのか、所謂、学びの応用の実際に着目して考察を行う。その際、保育者役、子ども役に加え、新たに他者の模擬保育を客観的に解釈する観察者の役割を導入した。これにより、どのような省察の視点が与えられたのかについても言及する。

キーワード：模擬保育 主体的な学び 保育実践力 応用性

#### はじめに

2017年に教職課程コアカリキュラム（文部科学省，2017）が策定され、教員養成における質保証の実現に向け、大学の教職課程で修得されるべき内容や目標が明示された。幼稚園教育課程における保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）では、その全体目標を「幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。」<sup>1</sup>とし、これを達成するための到達目標の1つに「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。」<sup>2</sup>が揚げられた。つまり、教職課程コアカリキュラム策定により、より具体的な授業方法が示されたのである。

幼稚園教育課程及び保育士養成の双方を担う本学においても、教育及び保育実習は学生にとって大きな課題である。そのため、演習科目として実習の事前指導を行うのであるが、それでも漠然とした不安を抱く学生は少なくない。そこで、より現場に即した具体的な学びの可能性を探るため「保育実習Ⅱ（保育所）」の事前指導では模擬保育を導入している。この実践的な学びが、学生の抱く漠然とした不安を、どのように解決可能な課題へと導き、それをどのように実習に活かす事が出来るのかを考察する。これらを継続的に探究する事で、学生の主体的な学びから培われる保育実践力の実際、及び、保育者養成の質的深まりを目指すものである。

---

\* 神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 准教授

\*\* 神戸親和女子大学発達教育学部福祉臨床学科 教授

\*\*\* 神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 教授

## I. 模擬保育の取り組みと課題

### i) 「主体的・対話的で深い学び」としての模擬保育の取り組み

教職課程コアカリキュラムで上げられている「主体的・対話的で深い学び」となる模擬保育の実践を行おうとする時、その概要や形態についての検証も必要となる。これに関して阿部(2016)<sup>3</sup>は、機関リポジトリ及び学会掲載論文、保育者養成校における論文などから模擬保育に関する論文を抽出し分析を行った。その結果によると、模擬保育を行う回数は、一回だけではなく実習前後に繰り返し行う事で、より実践力の深まりが期待出来るとの事である。また、模擬保育を演じる相手として、学生が保育者役や子ども役など役割を担う場合と、実際の子どもと行う場合とがあるとし、どちらの場合でも人前で実践する事に意義があるとしている。模擬保育の時間は、短いもので約8分、長いものになると30分となっているが、それはテーマや教材によって必要とする時間に違いがあるため、学生の成長を図っての設定であると言う。

更に、模擬保育を通して保育者としての実践力や意識を高めるためには、学生自らの振り返りと実習に向けての課題設定も必須である。これに関して井上(2010)は『講義で学んだ事を実習中に思い返し、実習で得たものを講義で思い出す』この連鎖をうまく学生の自発的な学びに繋げられたら今より確かな実践力として自信が持てるのではないかと述べ、保育者養成において理論と実践とが不可分である事を示している。また、長谷(2016)は「自己評価を行う事により学生は現在の自分自身の到達点や保育者として出来ている事、良さなどを認識する事が出来、そしてまた今後の課題や改善点を自覚する事が出来る」と、自己評価から自己課題に至るまでの学生の主体的な取り組みについて述べている。

これらを踏まえ、本学においても、学生自らが主体的に取り組む模擬保育の在り方や、身に付けた知識を実践の場において発展的に応用する力など、保育者としての育ちを探究すべく、継続的に模擬保育の実践を行うものである。

### ii) 2017年度模擬保育の学びと課題

2017年度に実施した模擬保育では、学生自身の振り返りから、「主体的な学びの姿勢」において非常に有意であった事が伺えた。特に、指導案作成の過程において、多角的な視点から検討を重ねる経験が、その後の実習に活かされたようである。また、他者の模擬保育を観察する事で、保育における様々な視点に気付く事が出来た事も「主体的な学びの意欲」へと繋がった。しかし、その一方で、模擬保育と実習での様子を一面的な視点<sup>6</sup>のみで捉え比較した学生は、特に活かされる事はなかったと振り返った。これは、年齢や保育内容、人数などの設定が模擬保育時と違ったためであると言う。つまり、模擬保育での経験が実践の場で柔軟に応用される事は殆どなかったのである。

結局、2017年度の模擬保育演習では、学生の主体的な学びの姿勢と意欲の向上、及び具体的な保育イメージの獲得などには非常に有意であったが、これを実践の場で活かすために必要とされる発展的な応用力に関しては、課題の残る模擬保育演習となった。

そこで2018年度は、事前指導の授業の一環として行われる模擬保育演習が、実習の場でどのように活かされるのか、その発展的な応用力の育ちに着目し取り組む事とした。

## II. 2018度の取り組みと学び

### i) 2018年度の取り組み

2018年度は、117名の学生が「保育実習Ⅱ（保育所）」を履修しており、それを3名の教員で担当している。昨年度は15回の内4回の演習を模擬保育に充てたが、本年度は7回の演習をそれに充てた。より細やかな指導が必要であるとの理由からであるが、40名前後の学生を一人の教員で指導するところに、次年度への課題は残されたと言える。

模擬保育の進め方として、1回目の演習は、1人の教員が40名程の学生を担当するところから始まる。学生は其々3人の教員のグループに分かれ、そこで8つの班を作り、模擬保育の担当を決定する。その後、各班でどのような内容の模擬保育を行うかを検討し、内容が決定すると指導案作成に入る。その際、まずは個人で指導案の作成を行い、2回目の演習で班の全員がそれを持ち寄り共有及び集約し、班として1つの指導案を作成する。昨年度同様、個人で作成した指導案を班のメンバー全員で共有及び集約し検討する事で、言葉の使い方や展開の在り方、指導案への記載の仕方など、自分の発想にはない視点を学ぶ事が出来るとの期待からである。

その後、模擬保育の実践に4回の演習を充て、1回の演習は2つの班の実践のみとした。昨年度の反省を踏まえ、模擬保育後の振り返りや実習へ向けての課題設定、保育者と子ども、観察者の視点からの意見交換を行う為の時間の確保が理由である。

### ii) 主体的な学びと応用

模擬保育演習の目的の一つに、主体的・対話的で深い学びの実現がある。机上での学びを自らの力で実践へと結びつけて行く為には、主体的な学びの姿は必須である。そこで模擬保育を通して主体的に培われる事が期待される実践力を3つの視点から設定し、その趣意を事前に学生に伝えた。昨年度は、学生の実践力の育ちを期待しながらも、それを具体的な言葉で伝える事はなかった。学生自身がその育ちを実感し、実習において柔軟に応用するであろうとの期待があつての事である。しかし、保育における実体験の少ない学生にとって、それは非常に難しい事であるとの反省が残された。そこで、今年度は実践力とその応用と言う視点を予め提示する事で、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す事とした。

その1つ目が「自ら結び付けて行く力（保育に絡める力）」である。昨年度の学生アンケートの中に「模擬保育では3歳児を設定し行ったが、実際の実習では5歳児が担当であったため、模擬保育での演習はほとんど役にたたなかった」との意見があった。実際に担当する年齢が違っていたとしても、模擬保育での学びがどのように応用出来るかと言う視点の育ちを期待しての事であったが、そこにまで至らない学生がいた事を顧みての事である。

2つ目は「自ら発想して行く力」である。これは「模擬保育の中で子ども役を大人が担当しても、先々を考えながらの行動になってしまうので、そこに意味は見出せない」との意見からである。子どもの気持ちを想像しながら、また、子どもへ気持ちを寄せる保育者の姿を考えながらの模擬保育演習を期待しての事であったが、自らの発想を豊かに広げようとする姿は僅かであった。この反省を活かす為の視点である。

3つ目に「応用して行く力」である。これは「実習先が指導実習を行う園ではなかったため模擬保育は役に立つ事はなかった」との意見からであるが、模擬保育を通して培われる実践力

には、子どもを捉える視点や保育を見通す力なども包含されての事である。それ故、指導実習だけが実習の中心ではなく、多角的な視点からそれを応用して行く力を期待しての事である。

結局、模擬保育演習において重視している学びとは、それをどのように自らの実習に結び付けて行くのか、所謂、主体的な思考力の育成を視野に入れての事である。それ故、昨年度の反省と課題を踏まえ、今年度は上述の3点の内容を事前に学生へ投げかけ、模擬保育演習を行った。

### iii) 横断的な学びと応用

昨年度と今年度との大きな違いは、保育者役・子ども役に加え、客観的な観察者の視点を取り入れた事である。また、昨年度は各模擬保育班内で保育者役と子ども役を担当したが、今年度は模擬保育班全員が保育者役とし、子ども役は随時指定するという方法をとった。1つの班は5名程なので、チーム保育と言う設定で保育者役を担当し、担当班以外から子ども役を約20名指定した。しかし、漠然と子ども役を設定すると混乱を招く恐れもある故、一定のルールを設けた。

まず、8つの班を2つに分け、4つの班が集まったAグループと残り4つの班が集まったBグループと便宜上した。双方共に20名程の大きなグループである。次に設けたルールは、Aグループから模擬保育を行う班が出る時は、Bグループの20名が全員子ども役になるというものである。その時、残りのAグループのメンバーは客観的視点から模擬保育を観察する事とした。この逆も同様である。つまり、これを8班繰り返す事で、全員が4回の子ども役と3回の客観的観察者、1回の保育者役、合計8回の模擬保育の実践を経験する事になる。

また、1つの班の模擬保育終了後、指定用紙に其々の立場から感想や意見、提案などを記録し、それを基に全体で振り返りを行い、最後には記入用紙を其々模擬保育担当班へ渡すと言う事を行った。このように横断的な視点から模擬保育を振り返る事で、学生自身の中に見えてくる事実があったと考える。

加えて、今回は7回の模擬保育演習終了後に授業アンケートを行い、本実習終了後にも模擬保育の実践的応用に関するアンケートを行った。この2回のアンケートから見えてくる学生の主体的・対話的で深い学びの姿、及び、模擬保育指導に関する反省と課題、今後の展望を次に述べて行く事とする。

## Ⅲ. 模擬保育に参加した学生の実際と振り返り

### i) 事例①：表現遊び ―模擬保育の様子―

今回、3人の教員グループに分かれた内の、1つのグループでは2歳児指導案1つ、3歳児指導案3つ、4歳児指導案3つ、5歳児指導案1つ、計8つの指導案が作成された。その中から、3歳児の指導案「色水遊びで色の変化を楽しむ」についての模擬保育を紹介する。

近年、保育所実習を前にして具体的にどのような保育実践をしたいのかなど、明確な目標を持つ事の出来ない学生が増えている。その一方で、保育所の一日の流れや子どもの発達理解(一人一人の子どもの姿を捉える)、保育者の協働や積極的に臨機応変に活動する事などを目標とする学生もいる。一見具体的な目標に見えるが、その内容の捉え方は漠然としたものが多い。



そのような中、多くの学生は指導実習での部分保育や全日保育の指導案作成、その指導案に基づき保育実践を行う事などに対して不安を抱いている。そこで昨年度の反省を踏まえ、今回のグループでは各歳児の指導案を作成する事にした。実習においてどの年齢に対しても応用が出来るのではないかと考えたからである。

まずは一人で指導案を考え、その後、班内で共有した。しかし、班で作成された表現遊びの指導案は、実習へ行く時期など全く考慮されておらず、季節感が感じられないものであった。それ故、担当教員からの助言を受け、夏の遊び「色水遊び」に思いが至ったと言う経緯がある。保育所保育指針、第2章「保育の内容」から5領域を学び、表現や言葉などは意識しているが環境を通した保育に対しての意識が低いように感じられた瞬間である。

その後、指導案作成にあたり軸となる「子どもの姿」を、暑くなりシャワーや手作り玩具で水遊びを楽しむとして捉え、模擬保育を実践した。まず室内で色水を見せ、出来た色をクイズ形式で問いかけ、次の活動に興味や関心を持たせた後、園庭で色水遊びを行った。準備物は、500mlのペットボトルに入った4色のポスターカラー（赤、黄、青、緑）の色水、紙コップ、割り箸（人数分）などである。子どもが誤飲しないように説明を行った後、色を選んで組み合わせを楽しんだ。子どもによっては、ジュースのような清涼感がある物を作ったり、4色全てを混ぜ、濁り感のある物を作ったりと様々であった。この時、保育者はどうすればきれいな色水が出来上がるのかを子どもと共に考え、その様子を見守り、2回目を行った。すると「今度は全部の色、混ぜたらあかんよ。」「そうや、そうや、全部混ぜたらあかんわ」など子ども役の学生から意見が出た。保育者役の学生は、子ども達が失敗しないように先々に指導してしまうが、考える時間（待つ）が取れた事は評価すべき点であった。

しかし「保育の内容」の5領域（環境）の学びから「夏の遊び」を捉えながらも、アサガオやサルビアといった草花や葉っぱのしぼり汁を使用するなどには気づかず、ポスターカラーの人工的な素材のみに頼っていた。この点を助言すると、自分達に欠けていた視点に気づき、保育の振り返りにつながった。

## ii) 事例②：4歳児の集団ゲームー忍者になって新聞紙じゃんけんを楽しむー

事例②を担当した班は「子どもの姿」を、鬼ごっこやかくれんぼなど、ルールのある遊びに興味や関心を持っていると捉え「忍者になって新聞紙じゃんけんを楽しむ」という指導案を作成した。子どもたちが忍者をイメージが出来るように、忍者の手遊びを導入に取り入れ、背の順で2チームに分けた。今回は、学生が子ども役を担当しているのでスムーズなグループ分けが可能であったが、これが実際の保育場面であると、保育者の配慮の有無により子どもの間で混乱が起こるのではないかと予想された。また、それにより本来の活動への意欲が低下するのではないかと考えられる為、2グループに分けるのではなく、保育者対子どもでもよいのではないかと助言を行った。

その後、ルール説明を丁寧に行い、じゃんけんに負けた子ども役は新聞紙を折りたたみ、その上に立った。1、2、3回戦へと進んで行く毎に折りたたまれた新聞紙の面積は小さくなる。その様子を見て保育者役は「はい、終了」との声を掛けた。ここからが忍者の技の見せ所となっており、更に小さくなる新聞紙の上にどれ程立てるのかなどが面白くなって行く。しかし、模

模擬保育は早々に終了してしまった。担当教員はその点が気になったが、観察者の視点で模擬保育を見ていた学生からは何も質問や提案などは出なかった。そこで担当教員より質問をすると「安全に気を付けないといけないから、もうこれでいいと思います。」と返事が返ってきた。他の学生はどのように思ったのかと質問を全体に投げ掛けたが、模擬保育を提供したメンバーへの気遣いからかコメントは得られなかった。

以上の事から、安全保育と言う視点から指導を行うのか、子どもの創意工夫を大切に育てると言う視点から指導を行うのか、この双方の視点を学生と共に整理しなければならないと考えた。何故なら、作成した指導案からは忍者になって転ばないように立ち続ける、一人一人の子どもの工夫や発想を大切にしたい、と言う思いがあったと推察されるからである。

安全保育の意味や模擬保育の学びを深めるためには、他のグループの保育をどのように評価し、PDCA サイクルをどのように機能させて行くのかが問われる演習となった。

### iii) 事例③：5歳児の制作 ―制作活動を通して友達と一つの作品を作る楽しさを味わう―

事例③を担当した班は「子どもの姿」を、友達と協力して遊んでいる、ハサミを使う事が上手になり様々な形が切れるようになっていくと捉え、「スイミーを通して仲間意識を高め、一人一人が頑張る気持ちを育む」と言う制作活動の指導案を作成した。まず、保育者役の学生がスイミーの絵本の読み聞かせを行った。その後、保育者の作った魚を見せ、グループ毎に魚の形が描かれた画用紙を配布し、それを切った。次に、折り紙を手でちぎり魚に貼り目を描き、出来上がった子どもから海に見立てた模造紙に貼った。「子どもの姿」には、ハサミが上手に使えるようになったとあるが、保育者の描いた通りに魚を切り、ウロコを手でちぎると言う内容であった。5色程の折り紙を自由に手でちぎりカラフルな魚を作るように説明していたが「私、黄色が好きだから黄色しか使わない」「そんなのおかしいわ」「先生Aちゃん黄色しか使っていない。あかんよね?」と、子ども役の学生はロールプレーを始めた。保育者役の学生は子どもの発言に対してどのように声をかければよいのか戸惑い、ただ笑うだけであった。その為、子ども達は騒ぎ始めた。しばらくすると騒ぎは収まり、子ども達は作った魚を模造紙の海に自由に貼り付けていたが、魚を貼り付けるところは鉛筆で指定してあった。模擬保育終了後、保育を提供した保育者役の学生から「子ども達が騒ぎ出した時にどのように言葉をかければよかったのか分からなかった」「こだわりの強い子どもの思いをどのように理解すればよいのか分からなかった」などの反省が述べられた。また、観察者として保育を見ていた学生からは「5歳児なのに活動内容が簡単すぎたのではないのか」「黄色い色ばかり使うAちゃんに対して、他の色にも目が向けられるような言葉をかけてもよいのではないか」「周りの子ども達にAちゃんにも思いがある事を伝えてあげればよかったのではないか」などの質問がでた。

以上、3つの事例を述べてきたが、模擬保育の実践を通して、指導案作成時のポイント（発達の理解）や「子どもの姿」から考える保育の「ねらい」と「内容」の捉え方など、様々な視点がある事に気づく事が出来たと考える。更には、実際に体験した各班の模擬保育指導案の全てが手元に残るので、実習に対しての不安な気持ちは和らいだようである。

iv) 模擬保育の経験がどのように実習に活かされたか（応用されか）を具体的に振り返る

保育所実習前に行った模擬保育演習が本実習でどのように活かされたのかについて記述式アンケートを行った。その中から、幾つかの記述を取り上げる。

- ・模擬保育で回りの人からアドバイスをもらったり良い点を褒められて自信がつく所もあったので、子どもの動きをある程度予測して準備をしたり、子どもの目線に立って活動しやすいように工夫が出来た。
- ・緊張もほぐれて柔軟に対応する事が出来た。模擬保育をしたので指導案作成時に子どもの姿をより想像しやすかった。
- ・制作と遊びの間には何もない間が存在する。その間が苦手です。何かしゃべろうと思うと「可愛いね」「ステキだね」しか出来なかったが、他の友達には豊かな語彙で表現、アプローチが出来ていた。私も盗んでやろうと思いました。実習中にも保育者の真似をしながら子どもと接する事で積極的と評価をして頂きました。
- ・みんなの指導案を見る事で自分とは違った視点でとらえていたり細かい所の援助を書いたりして、こんな考え方や援助があるのだと思った。
- ・実習で指導案を書く時、他のグループの指導案を見たり、自分のグループが指導を受けたりした事を思い出して援助に活かされた。
- ・子どもへの話し方・説明の仕方
- ・ルールを簡単な内容に変更する時があった。模擬保育で経験していたので対応出来た。先生にも「よく考えられているね」と褒めていただいた。
- ・どのように援助をしたらよいのか、どのような配慮が必要かと言う事が頭に浮かぶようになった。

このように、学生からは様々な意見が寄せられた。実習前に模擬保育の経験が複数回あると、本実習での緊張や不安感が軽減されるようである。また、配布された他のグループの指導案の存在は、自らの事前準備としての指導案作成に非常に参考になり、心にゆとりを持つ事が出来たようである。その結果、昨年度に比べ、今年度は実習中のトラブルは減少した。模擬保育で実践力を身に付け、自信が持てるようになった事が要因であると考えられる。

#### IV. 模擬保育の経験と保育者としての成長

##### i) 模擬保育での保育内容

3人の教員グループに分かれた内の、前述のものと別のグループ8班では、次のような保育内容で模擬保育が行われた。1. 動物バスケット（4歳児）、2. ハンカチ落とし（5歳児）、3. 紙飛行機づくり（4歳児）、4. ボールリレー（4歳児）、5. 似顔絵メダルづくり（3歳児）、6. じゃんけん列車（4歳児）、7. サンドイッチゲーム（4歳児）、8. ころがしドッチボール（5歳児）。

今回は昨年度の反省を活かし、多くの学生が模擬保育を経験出来るようにと、8班編成で1つの班を5人程度とした。5人と言う人数は、班の中で一人一人の考えが出しやすく、十分に意見を交わす事が出来ると考えたからである。実際、それぞれの考えを指導案へ反映させ、練りあげる事で作成する事が出来ていた。時折、人前（特に友達）で行う事へ抵抗を感じ、模擬

保育を無難に行いたいと思う学生もいたが、大多数は模擬保育に積極的、意欲的に取り組もうとする姿勢を示していた。

ところで、学生の作成した8つの保育内容からの指導案に、幾つか共通する事柄があった。それは、時間の制約（20分）と場所の制約（講義机や椅子の移動）から、準備する教材や保育の流れ、模擬保育として子ども（子ども役）の動きがスムーズに行えるものと言う考えのもと、ゲームなどの体を動かす遊びや集団遊びが多く取り上げられ、それを行う対象は幼児クラスのものであったと言う事である。

保育実習では乳児クラスに配属される事もあり、当然、乳児クラスの指導案も出てくると予想していたが、このグループからは乳児クラスの指導案を考える班は無かった。その理由として、上記に下線付きで示した要素があったからではないかと考えられる。もう少し柔軟に模擬保育に取り組むためには、これら要素への働きかけが今後の課題になると考える。

## ii) 保育者として身に付けたい力と成長

「保育実習Ⅱ（保育所）」では「保育実習Ⅰ（保育所・施設）」において「全体的な計画・指導計画を理解」した上で「指導計画を立案し、実践」する事が求められている。それ故、指導実習（いわゆる部分実習・全日実習）の機会も保育実習Ⅰより保育実習Ⅱの方が多くなる傾向にある。しかし、それは実習先の実習生受け入れの方針や保育形態によって回数や時間帯は違ってくる。そこで、今年度は本実習で指導案に基づいた保育を行った回数を114名（3名2月実習）の学生からアンケートで確認した。述べ数ではあるが、結果は部分実習が254回、全日実習が92回、半日実習が26回と、かなり多くの指導実習の機会が与えられたと言える。全く指導実習を行う事がなかった学生も3人いたが、平均すると1人2回となる。中には指導実習を10回行った学生もいた。このような経験から、今回の模擬保育の実践に関して「保育の流れに見通しがつき、落ち着いて保育に臨め、安心につながった」と、アンケートで答えるに至ったのであろう。

また、アンケートによる振り返りでは「子どもの姿を理解する」と言う項目につながる記述が多くあった。模擬保育演習に参加する前までは、指導案を作成する際、自分が指導しやすい視点からの立案が殆どであったが、演習を通して、子どもの立場や子どもの姿から作成する必要性を改めて学び、わかりやすい説明の仕方や保育の流れなど「子どもが主体」である保育を考えて行く事が、保育者の成長に繋がる、との理解を深めたようである。

そこで、模擬保育を行う事で、指導計画立案に関する知識や技術、実践力など、自らの学びや成長に繋がったとアンケートで回答した学生の記述を抽出し、その成長を確認する。

- ・ 模擬保育をする前の班での意見のやりとりと、模擬保育後の見ている人からのリアルな意見を受け、子どもへの配慮や言葉かけなど反省し次に繋げる力になっている。
- ・ 見通しを持って臨機応変に対応する力を身に付けたい。
- ・ 保育を行う上で全体を見る意識が持てた。
- ・ 模擬保育では先生役を行ったので、子どもたちの表情や様子から、遊びをわかりやすく展開させる事や、子どもの事を考えて遊びを工夫する大切さを学んだ。
- ・ ○歳児（想定した年齢）はこんな反応するだろうと常に考え続けアクションするという機



会となり、指導案作成時に子どもの姿をより想像しやすくなった。

- ・子どもたちのワクワク感を引き出せるような準備をしておく事、子どもの姿が具体的に想像出来るかが大切。
- ・子どもの気持ち、好奇心を掻き立てられるようにと考えるスキルが身に付いた。
- ・子ども役をした事から、子どもからの見え方やわかりやすさとは、と言う事が分かった。
- ・自分が立てた指導案を客観的に見てみる事で改善点が無いかと考えるようになり、物事を多面的に見られるようになった。

## V. 模擬保育での気づきと学び（記述式アンケートの回答より）

今回の模擬保育演習は、事前にどのような力の育ちを目指しているのかを全体場で明確にした後に、各教員のグループに分かれた。それ故、学生自身も模擬保育演習における自らの学びの視点を明確に持つ事が出来たようである。振り返りのアンケートからもそれは伺える。

### i) 指導案作成の視点からの気づきと学び

まず、模擬保育演習で最初に行った取り組みは指導案作成である。これに関して、多くの学生が自身の学びに繋がったとしている。何故なら、これまでの指導案作成は、各自で取り組む事が多く、全体で共有する事はあっても、それは数人の模範的な内容のものであった。しかし、この模擬保育では、各班で内容検討後、まず一人で作成するが、その後は班全員で検討をするという取り組みを行っている。この話し合いが深い学びになったと言う。これに関して、下記のような意見が多くあった。

- ・自分で作成した指導案を基に、班で話し合う事により、視野が広がり、多くの考えを持つ事が出来た。
- ・意見や考えを言う事で、様々な表現方法や流れ、展開の方法を知る事が出来た。
- ・班で話し合う事により、新しい視点からの取り組みを考えるきっかけとなった。
- ・指導案に使われる言葉が参考になった。
- ・全員で検討する指導案作りはとても学びになった。

### ii) 保育者役の視点からの気づきと学び

次に、模擬保育演習を通して育まれた保育者の立場からの学びである。ここでは、経験する事で初めてわかる事があるとの意見が多くあった。机上のみで考える保育者の姿と、実際に経験したその姿とでは、全く異なる展開があったと言う。例えば、子どもに掛ける言葉を指導案上では配慮を持って記していても、人前に立つと配慮を考える余裕もなくなり、難しさを感じたと言うものである。併せて、人前に立ちそれに慣れる事も実習前には必要であるとの声も多くあった。この経験が学生の不安を軽減させ、実習の場においても自信につながったようである。他にも下記のような意見が挙がった。

- ・保育者がどのように部分実習を見ているのかと言う視点が見えてきた。
- ・一度経験する事で時間などの見通しが持ちやすくなった。
- ・様々な視点から保育を想定しておく事の大切さを感じた。
- ・予測や対応策、子どもが楽しめる活動を発達にそって考える事の大切さに気付いた。

### iii) 子ども役の視点からの気づきと学び

子どもの立場からの学びでは、その姿を想像し、想定される動きを考える事の大切さに気付いたとの意見が多くあった。これまでは、保育の流れや運び方ばかりに注目していたが、可能な限り子どもの姿を想像する事で、予想外の事が起こっても落ち着いて行動する事が出来ると言う事を体験したようである。また、子ども理解が最優先であると気づいたとの声も挙がっており、学生自身が自らの子ども理解に深まりを感じているようである。その他にも下記のような意見が挙がった。

- ・子ども役を経験する事で、今まで以上に子どもの目線や気持ちを考えるようになった。
- ・実習生が実践しやすい指導案ではなく、子どもが楽しめる保育を考えるようになった。
- ・模擬保育（子ども役）と知っていても、保育者にはめてもらおうと嬉しいと言う感情があった。
- ・子どもの立場を経験する事により、教材の置き場所や何を準備するかなどの環境構成にもより深く注意が向くようになった。
- ・他班の模擬保育を子ども役として受ける事で見えてくる学びがあった。

### iv) 客観的な観察者の視点からの気づきと学び

客観的な観察者の立場を今年度より導入したが、この立場が今回の模擬保育演習の中で最も学びが深かったと学生は言う。いつもは見られる側であるが、保育を客観的に観察する事で外から見る事の大切さに気づいたとの声や、自らを客観視する事の意味や、観察する事で感じて学ぶ事もあると気づいたなど、多くの声が挙がった。その他にも下記のような意見がある。

- ・模擬保育中に行われる声掛けは、とても参考になる。
- ・客観的に模擬保育を観察する事で、自らの課題が明確になった
- ・保育の方法は一つだけではないと言う事が体験的に理解出来た。
- ・学生ならではの視点（観察者）から忌憚なく意見が言える環境が学びとなった。

### v) 模擬保育後の振り返りからの気づきと学び

最後に、各班の模擬保育後に行われた振り返りでの意見交換も学生は其々に学びを深めたようである。特に多く挙がった学びとして、自分では気づかない視点からのアドバイスが貴重であったと言う事、また、アドバイスや意見などが文字として残る事で、それが後々の学びに繋がり、実習においても改善の手立てとなったなど、非常に実践的な学びに繋がったようである。その他にも下記のような意見がある。

- ・振り返り時の感想やアドバイス、提案などの用紙が役にたった
- ・他者視点からの意見が貴重であった。
- ・実習前に全員からのメモを見返したが、中でもプラス的な視点からのコメントが自信となり自分を支えた。
- ・他人の考えや意見を聞く機会が勉強になり、自分の保育を何度もシミュレーションしイメージを持つ事が出来た。

また、毎回の模擬保育の実践後に振り返りを行う事で、事前準備の大切さや臨機応変に対応する力、細案の必要性などを再確認出来たようである。更には、模擬保育演習中に配布された

8 班の保育指導案が非常に参考になったとの事である。参考にするだけでなく、自分流に応用する事で活動出来る年齢の幅が広がり、実習中の指導案作成に非常に役に立ったとの事である。

## 終わりに

昨年度より試行錯誤で始まった模擬保育演習であるが、その反省と課題を顧みる事で、確実に学生の学びは深まっていると言える。個々の学生の感じ方や実習へ行く園によって、その充実度に違いはあったものの、実習後の個人面談で、自らの応用力の在り方に気づき、それを課題に挙げた学生は多くいた。

また、今年度は、乳児の模擬保育の実践が僅かであった事が反省として挙げられる。学生からも実習終了後に「乳児の模擬保育をやってみたかった」との声が多く挙がった。模擬保育の実践内容は全て学生に任せたが、次年度は積極的に乳児の提案を行う事も必要であるとの課題が残された。その他に、何回も模擬保育をしたい、実際の保育室で行いたいなどの声も挙がり、今後の事前指導の取り組み方の検討も必須であるとの確認が出来た。更に、ごく少数意見ではあったが、模擬保育の振り返りの中で「プラス的な視点からのコメントが自信となり自分を支えた」という記述は、今後の学生の成長と学びの根幹に関わる、新たな視点であると考えられる。

今後も、主体的・対話的で深い学びのさらなる実現を目指すべく、継続的に模擬保育の意義を探究して行く所存である。

## 註

- 1 文部科学省『教職課程コアカリキュラム』2017, 8 頁.
- 2 同上, 8 頁.
- 3 阿部アサミ著「保育者養成における実習に関する研究－模擬保育の意義に着目して－」『白鷗大学教育学部論集第10号』白鷗大学, 2016年, pp267-269.
- 4 井上範子著「研究授業『保育内容－言葉－』の実践報告」『高松短期大学研究紀要 54-55号』高松短期大学, 2010年, pp315-375.
- 5 長谷川秀揮著「保育実習Ⅱの「振り返り」と「課題」についての一考察」『四条畷学園短期大学紀要第49号』四条畷学園, 2016年, p15.
- 6 猪田裕子・久保木亮子・塩津恵理子著「保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察(1)」『教職課程・実習支援センター 研究年法創刊号』神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター, 2018, 26頁.

ここでの一面的な視点とは、実習中に模擬保育と同じ内容を実践する機会がなかったので、特に活かされなかった学生のアナウンス結果である。

## 参考文献

- 厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館, 2018年.
- 上村晶「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察(2)」『高田短期大学紀要第31号』高田短期大学, 2013年.
- レオ・レオニ著, 谷川俊太郎訳『スイミー』好学社, 1990年.